

ふるさとの声

大都市の駅は多くの人が行き交う。例えば、新宿駅では約240万人、東京駅では約82万人の人が1日に利用している。その人々の半数近くは地方出身者である。この地方出身者が多く行き交う駅に同郷出身者同士が方言や訛りのようなご当地言語を通じて自然と暮えるような音でつくられた領域を提案する。

コンセプト

大都市を行き交う多くの人の中には多くの地方出身者がいる。しかし、人々は都会の中では均質で、同郷出身者同士であっても、互いが同郷出身者であることには気がつかない。

地方で発達したご当地言語は、魅力的であるものの、田舎者という勝手な劣等感による恥ずかしさによって都会では聞くことがない。

耳に染み付いたご当地言語を同郷出身者を見つけるためのフィルターとして機能させる。都会の喧騒の中から故郷から遠く離れた土地で同郷出身者と巡り合う喜びが、忙しい日常に少しだけゆとりをもたらししてくれるだろう。



ご当地領域の形成

ご当地領域は指向性スピーカーを利用した、音による境界のみを持つ空間のことである。駅で流れるアナウンスや広告を、領域ごとに各ご当地言語に吹き替える。領域は視覚的な仕切りがないため、領域内へ入ることの敷居は限りなく低くなる。領域内の椅子は、地方出身者を溜め、巡り合いを促す。



ご当地領域の配置

方言の伝播には方言が文化的中心地から同心円状に広まったとする、方言周囲論という一説がある。中心からの伝播距離を領域の配置にそのまま利用する。

